

児童の飼育体験活動における活動評価のための指標について

土田あさみ^{1)*}, 横山 直²⁾, 木本直希²⁾

¹⁾ 東京農業大学農学部バイオセラピー学科

²⁾ 東京農業大学農学部バイオセラピーセンター

Studies on the evaluation of animal-caring activity for children

TSUCHIDA Asami*, YOKOYAMA Nao and KIMOTO Naoki

緒言

動物を介在させた活動は全国的に展開されている。人への安全を図るために介在動物を訓練しその適性を評価して行なわれている。活動に携わる人々は、動物の訓練やボランティア経験などを通じて活動技術を養っていると考えられる。これまでの報告には、介在動物に関する評価やクライアントに対する活動効果の評価はみられるものの、活動者自身に関する評価は見当たらない。そこで、今回我々は活動自体を振り返るための評価指標を得ることを目的に、本学農学部を設置されたバイオセラピーセンターに訪問する児童の飼育体験活動のデータの検討を行った。バイオセラピーセンターは生きものを人の健康や福祉に活用するための教育、研究、および実践を行なう場として設置された教育施設である。現在ウマ4頭、イヌ5頭、ウサギ2羽、そしてオカメインコ1羽を飼養管理している。

飼育体験活動について

本活動は自主的に参加する小学生を対象とするもので、センターに飼養管理している動物の飼育を学生と一緒に体験をするというものである。活動の主たる目的は、児童に動物の世話を通して動物を理解してもらうことにある。したがって、活動のための基本的なプログラムはあるが、プログラムをこなすことが目標ではなく、一つひとつの作業を最後までやり終えることを優先して行なう。児童一人につき学生一人という二者関係を設定している。そのため、少人数制の活動となり、児童によっては活動内容が異なる。このことは、参加児童にとって限定された学生との交流になるため、全参加児童共通の体験内容でないことを予め指摘しておく。尚、スタッフは当センターの委員と職員、そして学生ボランティアからなる。

児童の活動時間は午前中の2時間あまりで、活動の説明や動物の紹介を行なった後、それぞれの活動を開始する。飼育作業対象の動物はインコ以外の3種である。基本的には、飼養環境の掃除、動物の手入れ、動物の運動(散歩)である。活動時間の最後には児童がウマにニンジンを手から与える。参加の際には、保護者にビデオ撮影や作文などのデータ収集実施に対する承諾を得ている。

対象の児童について

2011年5月から2012年6月までの間で、計9回の活動を実施し、小学生児童延べ27名(男子6名、女子21名)の参加を得た。このうち、低学年は6名(女子)、中学年は12名(男子3名、女子9名)、そして高学年は9名(男子3名、女子6名)であった。また参加回数別にみると、1回のみ参加者は17名(男子5名、女子12名)、2回以上の参加者は4名(男子1名、女子3名)であった。

活動のデータ収集について

作業中はビデオ撮影を行い、作業終了後に参加児童は感想文を書く。また、活動学生は児童に対する記録をとる。活動を評価する手段として、現在のところビデオデータと児童の作文を用いている。今回は、まず、児童が書く感想文に影響する要因について分析し、ビデオ映像で抽出した行動についても検討を試みた。検討項目は以下の通りである。

- 1) 感想文の文字数に影響する要因
- 2) 児童の動物に対する姿勢に関する検討：ウマへの注視時間

*: 発表者

結果と考察

1) 感想文について

データのひとつと考えた感想文の文章量を情報量と考え、できるだけ情報量を多く得るため、感想文の情報量に与える要因について検討した。延べ人数 27 名の児童の記述した感想文は、一文書あたりの文字数が平均 102 文字（最小 40 文字，最大 273 文字），一文書あたりの語句数は平均 66 語（最小 25 語，最大 178 語）であった。

文字数に影響を与える要因としては、性別、学年別（1～3年生：低学年，4～6年生：高学年），活動の種類（担当動物がウマ，イヌ，あるいはすべて），活動参加回数，感想文の様式（質問項目設定形式，あるいは自由記述形式），および保護者同伴の有無とした。その結果，文字数に影響する要因として，活動参加回数（2回以上の参加で文字数は減少する， $p < 0.01$ ），活動の種類（多くの動物種を担当した方が文字数が増える， $p < 0.01$ ），感想文の様式（質問項目を設定したほうが文字数が増える， $p < 0.05$ ），そして保護者同伴の有無（同伴のほうが文字数が増える， $p < 0.05$ ）が挙げられた。感想文の内容をみると，2回以上参加で「びっくりしたこと」が減少し，多くの動物種を担当したほうがより「楽しいこと・嬉しいこと」や「びっくりしたこと」が増えた。以上のことから，活動内容の重層化が必要であること，さまざまな活動をしたほうが感想文は増えることが示された。保護者同伴の場合，感想文内容に保護者の影響が大きいことが考えられ，内容分析に際して考慮すべきことが示唆された。

また，スタッフがいても，児童はウマに足を踏まれないか心配し，イヌが吠えると怖いと感想文に記した。したがって，事前説明や現場でのスタッフの付き添いにかかわらず，児童への配慮が常に大切であることが示唆された。

2) ウマへの注視時間

2回以上参加した児童について，動物への姿勢を活動者が仲介できているかどうかを判断する基準の一つとして，ウマにニンジンを与えるときにウマを注視する時間を測定した。ウマにニンジンを与えるときに手

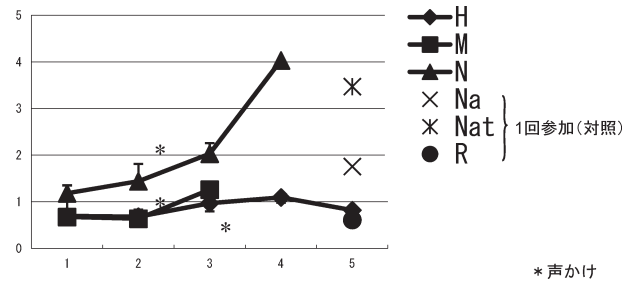


図 1 2回以上参加した児童のウマへの注視時間（秒）

に握ったニンジンから離れた瞬間からウマから目を逸らすまでの時間を「注視時間」として測定した。これは，ニンジン給与を楽しむより，ウマの食べ方やウマがきちんと食べられたかを確認するための注視時間ととらえている。注視時間がいずれも短かった児童 3 名（女子）は，注視するように声かけをしたところ，2名の児童でやや改善がみられたが，1名の児童ではあまり改善はみられなかった（図 1）。

今回の結果から，活動振り返りの評価視点として，まず参加児童の感想文は，項目別の質問形式にすることとなった。また，活動内容の深化，重層化が必要であることが示された。活動者としての有り方を評価する一つの指標として，活動者の声かけによるウマへの注視時間の変化に注目したが，対象者が少なかったため指標としての妥当性については明らかにはならなかった。しかし，今回の指標とした声かけが児童の動物への姿勢に影響する可能性が示唆され，児童の不安を軽減し安全で楽しい活動にするために活動者の参加児童へのかかわり方が重要であると考えられた。

今後，本活動の記録データから活動者の活動を評価する方法として，上記児童の感想文やビデオ映像だけでなく，学生の作業記録（担当児童の評価，児童との会話の記録）も分析して，より良い活動につなげていきたいと考えている。

謝辞

本研究を実施するにあたり，ご協力いただきました児童ならびに保護者の皆様にお礼申し上げます。また，ボランティアの学生さんたち，ご苦労様でした。